

勝林寺寺報

金子みすゞの詩

「朝焼小焼だ大漁だ大羽鰯の大漁だ。浜は祭りのようだけど海の中では何万の鰯のとむらいするだろう」

これは「大漁」と題した、金子みすゞさんの作品です。私はこの詩を読んだときに、深い感動をおぼえました。そして眼に涙がにじんできました。

ここには漁師たちが、網で魚を獲り、その大漁を祝つて、浜で酒を飲んで騒いでいる光景を眺めながら、海の中では、その鰯の仲間たちが、何万もの身内の死を悲しんで、これから葬式をするに違いない、と歌つているのです。日ごろ私たちが、まったく気づくことのない世界に、やさしいまなざしを注いで、深く心を通わせているのです。

このみすゞさんは、明治三十六年四月に山口県大津郡の仙崎に生まれました。父親はみすゞが三歳の時に死亡し、母親はとても情感の豊かな人だったようです。祖母は、とても熱心な真宗の信者で、家族みんなが朝夕に仏壇にお参りするような、仏教的な雰囲気の強い家庭に育つていきました。みすゞはそういう環境の中で、見えないものに目を注ぐという、深い心を養つていったようです。高等女学校を卒業して、まもなく、童謡を作るようになりましたが、やがて家庭の事情から無理な結婚をさせられ、娘をもうけました。しかし苦悶のすえ自死しました。昭和五年三月のこと、二十六歳の短い生涯でした。でも、五百十二編の詩がのこされております。その中にはこんな詩があります。

お魚

「海の魚はかわいそう。お米は人につくられる。牛は牧場で飼われる。鯉もお池で麌を貢う。けれども海のお魚はなんにも世話にならないし、いたずら一つしないのに、こうして私に食べられる。ほんとに魚はかわいそう。」

蟬のおべべ

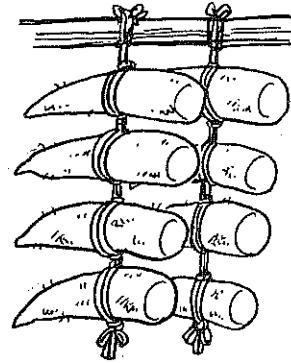
「母さま、裏の木かけに蟬のおべべがありました。蟬も暑くて脱いだのよ、脱いで忘れていつたのよ。晩になつたらさむかるに、どくへどどけてやりましょか。」

さびしいとき

「私がさびしいときに、よその人は知らないの。私がさびしいときに、仏さまはさびしいの。」

いずれも、私たちの心に、深く共鳴する詩ではありませんか。私はこれこそが真宗信心の世界だと思います。

(信楽峻磨遺稿法語集より引用)



葬儀
十月三十日
但東町佐田 石田隆男様 八十八歳

ご報告

十一月二十三日、先月往生いたしました前住職の満中陰法要を多くの皆様のお参りをいただき、滞りなくお勤めさせていただきました。役員の皆様をはじめ、「門徒の皆様には、法要を陰日向からお支えいただき、ありがとうございました。

合わせて、初七日から六七日まで、町内のお寺様にお世話になり、「門徒は勿論、前住職と縁のあった多くの皆さまと共に勤めをさせていただきました。心より感謝申し上げます。前住職生きあとも変わらず勝林寺をお支えいただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

ご案内

もちつき

皆さまからお供えいただきましてモチ米で、まずはお正月のお供えのお餅を搗きます。次に、搗き立てるお餅を、おろし餅、きなこ餅、しょうゆ餅などでいただきます。そして、頑張った褒美に家族へのお土産のお餅もあります。今年は、特にたくさんモチ米をお供えいただきましたので、ぜひ、たくさんの方にご参加いただきたいです。お待ちしております。

一二月三十一日（日）午後十時半より
かねつき

早いもので二〇一七年が終わります。今年の最後をお寺の鐘を撞いて締めくくりましょう。

各種お雑煮、ぜんざい、甘酒などのふるまいもありますよ。

一二月三十一日（日）午前零時より

修正会（しゅしょうえ）

新しい年を阿弥陀様の前で、みんなでスター

トイたしましよう。

一二月 勝林寺 予定	十一月二十三日、先月往生いたしました前住職の満中陰法要を多くの皆様のお参りをいただき、滞りなくお勤めさせていただきました。役員の皆様をはじめ、「門徒の皆様には、法要を陰日向からお支えいただき、ありがとうございました。
一日（金） 奥小谷 報恩講	森友敏裕宅 七回忌
二日（土） 西山 十三回忌法要	小田 報恩講
三日（日） 小田 托鉢 報恩講	唐川 報恩講
四日（月）	山田康博宅 二五回忌
五日（火）	野尻・矢根 報恩講
六日（水） 太田・東里 報恩講	石田則昭宅 忌明法要
七日（木） 市場 報恩講	出合 総仏講
八日（金）	百合・桐野・寺坂 報恩講
九日（土） 上小田 総仏講	丸中・片間 報恩講
一〇日（日）	矢根 報恩講
一一日（火）	暮坂 報恩講
一二日（水）	鉢山・豊岡 報恩講
一三四日（木）	口小谷 報恩講
一四五日（金）	口小谷 報恩講
一五六日（土） 出石組 忘年会	百合・桐野・寺坂 報恩講
一六日（火）	みのりを聞く会
一七日（水） お餅つき	上小田 総仏講
一八日（木） 大掃除	丸中・片間 報恩講
三一日（日） 除夜会	勝林寺 0796-52-3083 緊急時 090-3708-5424

二人の宗教家

これは偶然であつたのかもしれません。

一週間のうちにこの老人ホームに見まいに来てくれた二人の宗教家が「人は、生きてきたようにしか死ねない」という言葉を出して、全く反対の話をしてくれたのです。

まず初めの一先生」とは、はれていた宗教家の

話です。人は生きてきたよ、はしか死れない
そうだよ。だからいい死に方をしようと思つたら、生きている間が肝心なの。いい行いをつとめなければいい死に方はできない。死ぬまで修養修養。「人は、生きてきたようにしか死ねない」

でもれどあとで和たぢに思つたんでも、理屈はなるほど通つてゐるけど、實際はなかなかそうはいかないのでないだらうか。修養修養と言つて、ある修養団体に入つてまで頑張つていたおじいさんの死によう。気の毒だけれど、そのように死んで行けなかつた。反対に、寝てばかり、人の悪口ばかり愚痴ばかりだったあのおばあさん、案外安らかに亡くなつた。そう思うとなんだか割り切れない。

後からここへお見舞いに来た若いお坊さんやつぱり「人は、生きてきたようにしか死わない」という言葉を出してのお話でしたが、牛の話には反対のようう。「人は、生きてきたよう

「しか死ねない」そうですね、私たち、外側の姿はどうであれ、心の中暮らしの中は地獄を生きてきました。餓鬼や畜生のような浅ましい汚くらしかできませんでした。「人は、生きてきたようにしか死ねない」地獄のような死によって餓鬼のような死にざま、畜生のような姿で死んで何の不思議がありましょか。その地獄・餓鬼・畜生を生きて、その様にしか死ねない私を、まるまる」と包み、「えさせてくださいる如来様の慈悲たるが、今聞くえてくるお念仏なのですよ

功德は十方にみちたまう
（くわく は じゅうがたに みちたまう）

「チクシヨー」。悔しがっている人が、口にするのをしばしば見かけます。漢字で書けば「畜生」。では、そもそも、どういう意味かと聞かれれば、だいたい獣や鳥をイメージしませんか。

ところで、仏教の持つ生命觀では、私たちは六道（天・人・阿修羅・畜生・餓鬼・地獄）という世界をグルグルと生まれ変わり続けていくるを考えます。畜生界とは下から三番目で、私たち人間より下です。このことについて、『涅槃經』に興味深いお示しがあります。

卷之三

「 う世界をグルグルと生まれ変わり続けていくる
と考えます。畜生界とは下から三番目で、私た
ち人間より下です。」の「ことについて、『涅槃經』
に興味深いお示しがあります。

教えに出遇わなければ、それにも気づかず無愧のまま終わっていたというのです。本当に恐るべきは、無慚無愧とも知らずに生きていた自分なのです。

るお供えを持つてお参りしてくれました。若院
も、大阪での勤務を少し早めに終わらせていた
だき、ほぼ毎回お参りしてくれました。希里や
入海は、学業優先であり七日のお参りはできま

慚は人に羞づ、愧は天に羞づ。これを慚愧と名づく。無慚愧は名づけて人とせず、名づけて畜生とす。『註釈版聖典』二七五頁)

つまり慚愧とは、自分の罪を人に対し、あるいは天（ここでは仏陀や菩薩の意味）に対しても、ここから恥じることであり、人間か畜生かを区別るのは、人間か動物かではなく、慚愧が生るかないかだというのです。大変に考えさせられるお言葉ですね。

さて話を戻すと、悔しい時に出る「チクシヨー」。調べてみると、自分にとつて邪魔になつた相手を罵つて言うそうです。ということは、自分のことは棚に上げて、相手を無慚無愧だと罵倒していることになります。ですから、もしその言葉が私たちの口から出た時には、そのまま、ブーメランとなつて自分に戻つてきてしまうことによく気をつけなければなりません。

せんでしたが、満中陰法要にはそろつて帰つて
きてお参りしてくれました。本当に多くの方々
に見送つていただいた前住職です。上に紹介し
たテレホン法話で「人は、生きてきたようにし
か死ねない」と教わりました。いくら取り繕つ
ても、人であれば皆、煩惱にまみれて生きてき
たのですから、浅ましい死を迎えるのは仕方の
ないことだとよく理解できました。ただ、死に
方はそうであつても、見送られ方は、「生きてき

さて今月の「」和讃を全て示せば次の通りで
無慚無愧のこの身にて まことのこころはなん
れども 弥陀の回向の御名なれば 功徳は十

けす。
今月の「和讃」を、もう一度味わってみてください。
井上 見淳(いのうえ けんじゅん)

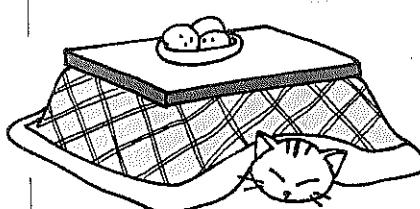
にみちたまふ（『註釈版聖典』六一七頁）
「無慚無愧のこの身にて……」とは、親鸞聖
が「罪を罪とも思はず、それを恥じる」とか
く生きている私に、眞実のこころなどない」
痛切に慚愧されているのです。しかしながら
阿弥陀さまが万徳を込めて喚びかけてください
救いの名告り（名号）によつて、功德は十方
満ちわたつてゐる。それが今、この私を通し

A black and white line drawing of a small, round, striped cat lying on its back on a checkered mat. The cat has its eyes closed, appearing to be sleeping. Above the cat, on the mat, is a small, shallow dish containing three dumplings (momo). The background is plain white.

くださる方だった】「優しい父だった」——「
温かく応援してくれるおじいちゃんだった」——
お見送りくださる方一人ひとりにとって、いろ
いろな前住職の姿があり、それがその方にとつ
て大切な存在だったことが、同じ本堂の中でお
参りしていると自然と伝わってきました。
だから思うのです「人は、生きてきたようじ
見送られる」(by 坊守)

出ているお念佛であると実感され、感動されるのでしよう。親鸞聖人が、「これほど厳しい言葉で自らのことを言いきられた裏には、すでに死は、才下さるミニーニに自分の眞の姿を

前住職が往生してから二カ月足らず、本当に多くの方が本堂にお参りしてくださいました。通夜、葬儀は勿論のこと、七日ごとのお参りでも、一



見送られる」(by 坊守)

(文責
坊守)

(前住職テレホン法話集より引用)

満ちねたつている。それが今この春を這

四

卷之二

勝林寺 0796-52-3083 緊急時 090-3708-5424